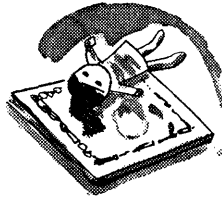


# ユートピア



鈴木直美

「つめたいね、せんせい」「ふゆっこぴゅんがどこかに隠れてるかもしれないよ」「ヨーシ、ばくがやつつけてやる」数人の男の子たちがそういつて寒さの中を元気に走っているような初冬の日。

「きょうは水曜日（お弁当なしの日）だしお天気もはつきりしないし、お部屋の中で思いきり遊ばいいわ」と、そのみを目標としてスタートを切った。もうすっかり幼稚園にも慣れ、それぞれがとても楽し

い毎日をすごしているな、と感じられる三歳児のクラスである。

そして同じく入園してやっと八ヶ月の新米先生の私もよい緊張もだいぶとれてきて、子どもたちと走ったところがったりして遊び楽しく毎日を過ごしているが、同時にそろそろ二期も終わり一年のまとめの時期にはいりかけて、いったい私に何ができたろうかと不安を感じたり、反省させられたり、あせりのようなものを感じたりしているこの頃でもある。

特に、毎日をたたく遊び満足した顔で帰れることを目標にすごしていると、「形になって残るもの」が少なく、音楽リズムの領域ではこの程度のことを、絵画製作では……などと書いてある本を読んだりすると、ピアノをひくと大声でどなっていたり、スキップなんてぜったいしないとかんばったり、お絵かき帳などほとんど白紙ばかりだったり、セロテーフなんかお誕生会のかご作り（毎月一回これだけはかなり義務的な活動）以外使ってるの見たことなかったり……そんな子どもたちを見て、これは保育者がいたらないからではないか

と非常に心配になったりもする。

そんなある日（つまり、はじめにかいたお天気のさえない水曜日）いつものようにおもちゃの散乱するお部屋で、それぞれがそろそろ遊びに定着しはじめた頃突然、「先生、レコードかけて、おかみ」と女の子がやってきた。「三びきのこぶた」の絵本を見ていて思いついたらしい。音楽劇のレコードが何枚かあるうち、だいぶ前にかで「赤ずきんちゃん」をかけたことがあり、その時はわずか二、三人が聞いただけだったが、それを覚えていたらしい。ところが「三びきのこぶたが」みあたらず、彼女の了承をえて「狼と七ひきの子やぎ」をかけた。

その音を聞きつけて数人が集まった。

「えーと、音楽劇……劇遊び……リズム……」とうやうや指導したらいいのかなと準備もなくとまどいがちの先生にはおかまいなく、みんな目を輝かせて聞いている。「しかたない、なるようになる」と常にいきあたりばったりがお得意の（これは自慢にはならないだろうが）私はレコードの進み方

にあわせてお話をいれていった。

一回終わるともう一回……そのうち狼のところに簡単な動作っぽいものをいれてあげると、子どもたちもう子やぎになりきったようにキヤーキヤー騒いで逃げたりしている。だんだんに他の遊びの子どもたちもはいつてきて、ほとんど全員が集まってきた。おかあさんやぎになる子、狼になる子、一番小さい食べられないやぎになる子、そんな役割はわからないけどただ楽しそうに皆と動いている子、台本(?)以外だけどウルトラセブンになって狼をやつける子まで出てきて、何回も、何回もついに帰りまでくりかえしくりかえし楽しんでいた。

狼に食べられるところと、狼のおなかをはさみで切るところが最高に楽しいらしく、そのうちレコードなんて無視気味。終わってから「あれえ、レコードまだなってる」と叫ぶ子がいたり、ちゃんと曲のつてスキップしたりしていると思うと、全然おかまいなしだったり、狼志願者が多くて二、三人子分をひきつれて狼がきたり、もういえてもいいのではないかしらと思っ

てもまだ話を聞いたことのない子どもの口から「ごめんなさい」(狼が最後にみんなにあやまるころ)が聞こえたり、はじめのうちは狼が来るとほんとに泣き出してた女の子がちゃんとおかあさん役ではおかあさんっぽくなったり……ともかく皆非常に楽しく、よくも飽きないと感じするほど何回も、「上演」された。いつもこういう新しいことにガンとしてはいらずにいる男の子までが最後の頃には参加し、おかたづけの時に「つまんないな、お弁当ないで遊べないよ」とブツブツ言っていた。

こんな一日が終わって前述の不安が少し軽くなった。三歳の音楽劇ってこれでいいんだな、「ちゃんと」することよりも楽しかったこと、それがこれから役割をとることにも、リズムにあうことにも、いろいろなことへの第一歩としてのすばらしい芽になるのではないかと子どもたちにはつきり教えてもらったような気がする。あそこで私が変に音楽リズムとか「言語」「社会」とかを気にしたら、そしておとなの好みでまとめたりしようとしたらあんなに長続きしなかったと思う。

よく考えてみたら、みんなで歌う時に大声をだす子はいつかお庭で自動車の歌をいっしょに歌ったりし、皆の中ではスキップしない子だってお手洗いから帰ってくる時スキップで帰ってきたし、お絵かき帳が白紙でも黒板に大きな絵をかいていたり、普段何も作らない子がふっと「ギャングのビストル」を作ったりしたし……自然な生活の中でいろいろなことを身につけていく子どもたちをみて「子どもの本当の自由」のむずかしさを感じる。

特に三歳児なんか、先生が「カリキュラム」や「教育課程」で頭の中をいっぱいにさせているより、自分と同じように怪獣になつて走ったりころがったりしてくれる方がずっといいのではないかと思う。子どもがずつといいのではないかと思う。子どもの本当の姿にふれて、その上で未来を見つめて「今、この子に何が必要か」を適切に考えてあげられる先生になりたい。日々の計画や準備に怠慢で不勉強な私の「逃げて道」のような気もしないでもないが、「この話をしてあげよう」と思っていたってその日は違うお話の方がその日の子どもたちには似あう時だってあるのだから。